

膀胱がん 酵素が転移促進

北大教授ら解明 風邪薬成分、抑止に効力

北海道大の田中伸哉教授ら研究チームは、筋肉の層に達した膀胱がんについて、特定の酵素が増えて抗がん剤の働きを阻害し、転移を促進していることを確認した。この酵素の働きを風邪薬に使われる抗炎症薬が抑えることから、北大では来年度から抗炎症薬を使った臨床研究を開始する予定だ。論文は、英電子版科学誌「サイエンティフィック・リポーツ」に掲載された。

膀胱がんは国内で年間2万人がかかるとされ、約8割が転移しにくい膀胱の内側の粘膜にとどまる。だが、筋肉の層に達すると転移しやすいタイプになり、5年生存率は約1割と非常に低い。進行が速いことが特徴

だ。

研究ではマウスの膀胱にがん細胞を移植。移植したがん細胞と、45日後に転移していた肺、肝臓、骨にあるがん細胞を比較した結果、「アルドケト還元酵素」が3〜25倍に増加していることを発見した。実際の膀胱がんの患者25人でも同様の増加を確認した。

田中教授らは、抗がん剤を投与した際、この酵素ががんの周囲で起こる炎症の副作用として発生し、さらに抗がん剤の働きを弱めることを解明。がん細胞の動きが活発化し、転移を促していることも判明した。

これまでの研究で風邪薬の成分になっている抗炎症薬「フルフェナム酸」が、この酵素の働きを止めることが分かっており、耐性を獲得したがん細胞に投与すると、抗がん剤の効力が回復することも、田中教授らは確認した。

田中教授は「すでに認証されている風邪薬を使ったため、実用化も早く、患者の

金銭的な負担も軽くて済む。進行した膀胱がんの治療に、抗がん剤に抗炎症薬を併用することで完治させることが期待できる」と話している。